幼児が感じるナンセンス絵本の魅力
－長新太の『キャベツくん』と幼児の反応－

Young Children's Reactions to Having Cabbage-kun, by Shinta Cho, Read to Them：
The Appeal of Nonsense Picture Books for Young Children

江川　葵（認定こども園 石神井南幼稚園）
Aoi EGAWA

概要
大人が好ましいと捉える絵本と幼児が面白いと感じる絵本は必ずしも一致しない。幼児が好むと言われているナンセンス絵本『キャベツくん』を取り上げ、幼児はそのどこに反応を示し、大人はその絵本をどのように捉えているか検討するため、家庭での読み聞かせ場面の動画分析調査とアンケート調査を実施し、前者は保護者に読み聞かせと撮影を、後者はオンラインフォーム作成ツール Google Forms を用い保護者に読み終えた後の幼児の反応や保護者の感想等の回答を求めた。その結果、幼児の自然な発言や笑いは「あり得ない状況や状態」という「意外性」の場面で多くみられたが、大人はナンセンス絵本に対して面白く感じる人もいれば、「不思議」「絵が理解できない」と感じる人もいた。幼稚園等での購入絵本選定は主に保育者等大人が行っている現状がみられるが、「大人が幼児に読み聞かせたい絵本」だけでなく、幼児も絵本選びに参加して幼児が喜ぶ絵本にも目を向け、豊かな絵本環境を整えていくのが望ましいのではないかと考えられる。

キーワード：幼児，ナンセンス絵本，長新太，読み聞かせ，笑い

Abstract
Picture books that adults perceive as favorable and picture books that young children find interesting do not always coincide. In order to examine what is attractive about the nonsense picture book Cabbage-kun, a video analysis study, and a questionnaire survey were conducted of scenes in the book being read to children at home. Parents in the video study, read the story and filmed the children's reactions, while the questionnaire survey read the book and reported their impressions and children’s reactions via Google Forms. The results showed that children’s spontaneous comments and laughter/smiles were more common in 'unexpected situations', i.e., 'impossible situations or states'. On the other hand, some parents found nonsense picture books funny, while others did not. In Japanese kindergartens, most picture books purchased are chosen by teachers. If young children could choose picture books that they themselves enjoy, kindergartens would become richer picture book environments.

Keywords： young children, nonsense picture books, Shinta Cho, oral book reading, laughter/smiles

１．はじめに：問題の所在と本研究の目的

幼稚園教育要領解説（2018）には、「幼児は、その幼児なりの感じ方や楽しみ方で絵本や物語などの世界に浸り、その面白さを味わう。絵本の絵に見入っている幼児、物語の展開に心躍らせている幼児、読んでく

れる教師の声や表情を楽しんでいる幼児など様々である。教師は、その幼児なりの感じ方や楽しみ方を大切にしなければならない。」[1]と「幼児なりの感じ方や楽しみ方」を大切にするよう言及されている。一方、幼稚園等[2]で購入する絵本の選定は大人であることが多い。例えば、東京大学大学院教育学研究科付属発達保育実践政策学センター・ポプラ社（2020）の共同研究[3]でも、1,042の幼稚園等に誰が購入絵本を選定しているか複数回答で質問したところ、保育者85.8%、園長・副園長73.3%、主任54.3%であり、子どもは6.9%と格段に少ないという結果が示されている（図１参照）。

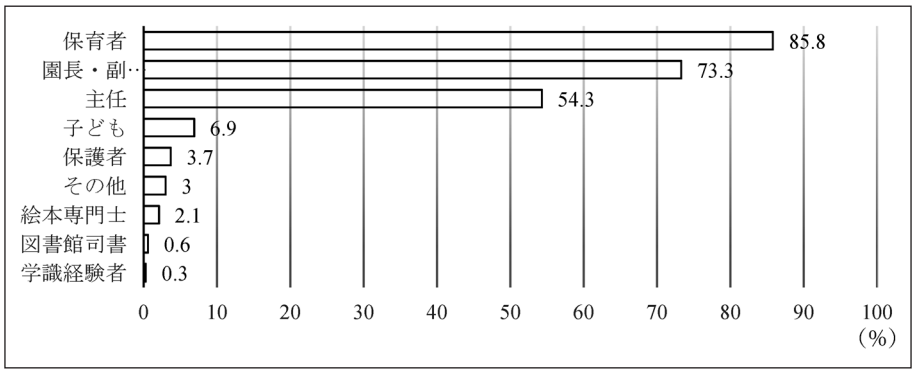


図１　購入する絵本を選ぶ人（複数回答：あると答えた割合）

（東京大学大学院教育学研究科付属発達保育実践政策学センター・ポプラ社，2020，P.10より転載）

ここで注意しなければならないのは、大人や専門家が幼児にふさわしいと考える絵本は幼児が好んだり面白いと感じたりする絵本とは一致しないことが多いということである。具体的には、大人の選ぶ絵本は「『良い絵本』[4]に推薦している」「話を一番伝えられそうなもの」「色合いがはっきりしているもの」「物語に合っている絵」であり、子どもが選ぶ絵本は「躍動感があり、面白そうだと感じるものや、にぎやかな絵本」「自分を投入・投影することが出来る対象が描かれていること」「絵から『かわいい』『楽しそう』と感じるもの」である（中西・覚道，1992、村上・小路，2019より）。具体例を挙げれば、長瀬ら（2003）は幼稚園における絵本の読み聞かせに関する調査結果として、読み聞かせ第２回の対象絵本『もりのなか』は、「これまでの代表的な絵本の研究者の多くが子どもにふさわしい絵本として推薦しているが、今回の調査において取り上げられた他の絵本と比べて、それほど子どもたちの反応は高くなかった」[5]と述べる[6]。さらに、幼児が「面白かった」と答えた平均が比較的高い傾向にあった読み聞かせ第３回の対象絵本『ゴムあたまポンたろう』や第７回の対象絵本『じごくのそうべえ』は、「文の内容に関するもの（空想性、ユーモア、意外性、冒険的要素）が多い」、「絵については、鮮やかさと躍動性がある」と述べている[7]。また、笹倉（2016）は、日本のナンセンス絵本の中で、長新太の『キャベツくん』を例として取り上げ、「奇想天外な発想は、なかなか大人には受け入れがたい発想であるが、どういうわけか幼い子どもが読むと腹を抱えて笑う」という。加えて、中村・代田（2014）の論考では、幼児と大人では同じ絵本でも見ているところや感じていることが違うことが指摘され、中村柾子[8]は「子どもが飛びつく絵本には理由がある気がします。大人は意味を求めますが、子どもは、そこに描かれている世界が自分にとって満足いくかどうかだけを見る」、「大人はまず文字に目が行きますが、子どもはじっくり絵を追っていた」と述べ、さらに代田知子[9]は「子どもは音と絵を同時に受け止めて楽しみますから、言葉に意味がなくても関係ありません」と価値観や視点の違いを述べている[10]。このことから、幼児と大人で捉え方が違うのには、価値観や視点の違いがあるのではないかと考えられる。

管見の限り先行研究では大人と幼児では絵本の話の受け取り方に違いがあること、そして、幼児に人気のある絵本には意味不明な音が出てくる本やナンセンス絵本があること等の提示に止まっているのが現状である。そこで、本研究では、「幼児はナンセンス絵本を好む」「大人は幼児がナンセンス絵本をなぜ好むのか分からない」という点に着目し、実態調査を行いその結果を分析することにより、実際に幼児はナンセンス絵

本のどこに反応し興味を示すか、また、大人はナンセンス絵本をどのように捉えているかについての考察を試みたい。なお、本論文投稿については共栄大学研究倫理委員会の承認を得ている。

２．ナンセンス絵本とは

２．１　「ナンセンス絵本」の定義について

「ナンセンス絵本」と称される絵本は、代表的作家として長新太、佐々木マキ、井上洋介などが挙げられ、増え続けている。「ナンセンス絵本」の明確な定義が見いだせなかったので、ここで、共に「おかしみ」に関連する「ユーモア」という語にも言及しながら、本研究における「ナンセンス絵本」の定義をしておきたい。英語の「nonsense」は「non（否定）+ sense」であり、non（否定）を「ナン」と仮名書きするか「ノン」と仮名書きするかによって「ナンセンス」と「ノンセンス」の２種類の日本語表記がみられるが、それは単なる表記上の問題であると捉え[11]、本研究では引用部分以外は「ナンセンス」という表記に統一する。

まず「ナンセンス」について取り上げると「ナンセンス」は「non（否定）+ sense」であり「sense（感覚、意味、意識、理解）と逆のもの」「sense がない」ことなので、辞書等[12]では「たわごと、ばかげた話、わけのわからない、無意味」と記されている。「ナンセンス」は日常生活で使う場合に否定的な意味合いがあるが、原（1992）は通常日常生活で扱うナンセンスと文学上のナンセンスとは意味合いが異なる[13]と説明している。

「ナンセンス（ナンセンス絵本）」についてみてみると、原（1992）は「つねにおかしみを伴う」ことや「無茶苦茶と思える世界」であり、「現実からもっとも遠い距離にある＜現実逃避の文学＞」と述べる[14]。また、日本児童文学学会（1988）は「自由と解放」「現実とのさかさまの世界」「言葉遊びを伴うことがある」[15]、山本（2017）は「固定概念や理性からの解放を目指すもの」「独自に構成した理性的なルールを持つ」[16]、さらに、鵜野（2009）は「閉塞感や束縛感を覚え、そこから逸脱し、これを解体し、さらには新たに、自分自身にとっての『意味ある事柄』や『意味ある世界』を自ら作り出そうとする」という「ナンセンスへの指向性」についても言及している[17]。

一方、「ユーモア」については、日本児童文学学会（1988）と笹倉（2016）の説明が参考になる。日本児童文学学会（1988）は、ユーモアは「おかしさの一形態」であるが、「許容と共感に基づき、他者を傷つけることのない調和的な複合感情で、ゆとりある態度より生まれ、他者の心を開放する」[18]と解説する。さらに、笹倉（2016）は「『意味を成す』ことによって面白みが引き出される」[19]と述べている。

「ユーモア」が「大抵の人には意味が理解できるおかしさ」のに対し、文学における「ナンセンス」は「なんとなく面白く感じるおかしさを持ち、常識や一般的な社会での意味ある事柄から逸脱した、幼児が自分自身で意味ある事柄や世界を作り出す指向」であると言えると考え、本研究では「ナンセンス絵本」を「今生きている世界の現実から離れた、新たなおかしみを伴う世界を作り出す絵本」と定義づけたい。

さらに、本研究遂行にあたり、「ユーモア」と関連して「笑い」についても検討しておく必要があるだろう。「笑い」の動詞形である「笑う」は、辞書では「顔の筋肉をゆるめ、また、声を立てる」[20]、「表情をくずしたり声を出したりする」[21]、「顔の表情や声となって表れる」[22]と記されている。すなわち、「声」として表出される状況はもちろんであるが、声を出さなくても「顔の筋肉をゆるめ」たり、「顔の表情」として表れたりするものも「笑い」に含まれると考えらえる。そこで、本研究では、発声を伴うものだけでなく、発声を伴わない表情のみの表出も「笑い」として捉えることにする。

２．２　長新太の作品の魅力

本研究で「ナンセンス絵本」を分析するにあたり、次の二つの理由から長新太の作品を取り上げる。第一に長新太は、岩崎（2006）[23]、中泉（2006）[24]、福音館書店（2018）[25]等、複数の文献で「ナンセンス絵本の

代表者」して紹介されている、第二に、「よい絵本」[26]として選定されている絵本がナンセンス絵本作家の中でも著しく多いからである。長新太の絵本作品の魅力の根底をなすのは漫画から出発したことである。中川ら（2011）は長新太について「漫画で培った発想法でナンセンス絵本の可能性を切り開いた」[27]、また竹内（2015）の中で長新太自身が『アルマジロ』（ナート，1991）において、「根底にあるのはマンガ」[28]と述べており、今江（2006）は『がんばれさるのさらんくん』の絵本において「漫画家らしい奇抜な発想にあふれた画期的な一冊」[29]、伊藤（2006）は『おしゃべりなたまごやき』の絵本において「ひとコマ漫画や四コマ漫画でつちかってきた洗練された線や大胆な画面構成」[30]と述べており、漫画家の頃からの発想や感覚、絵や色彩センス等が、長新太のナンセンス絵本の魅力へと繋がっていると考えられる。それに加え、竹内（2015）も「長新太のどんな作品にも笑いのセンスがある。快笑、微笑、苦笑、笑った後でふと考え込むような笑い、それをもたらすのは、既成概念を打ち砕く独自の発想や展開と、それを自在に表す絵だ」[31]と述べる。このように、長新太絵本の特徴については、1）発想（アニミズムな思想がキャラクターや絵に表れている等）[32]、2）展開（言葉の反復や出来事に変化を持たせた反復、抽象的な言葉や簡潔な言葉が絵と組み合わさり、物語を伝える）[33]、3）絵（キャラクターの動きや変化に重きが置かれ、物語を展開する）[34]、と多くの文献で言及がなされている。

以上をまとめると、長新太の絵本には、漫画を根本とした幼児の感性に触れるナンセンスやユーモアな発想、擬音語・擬態語や抽象的な言葉、変化を持たせた反復のある物語の展開、キャラクターの変異的な絵や風景の固定によりキャラクターの変化や動きを際立たせているところに魅力があるといえよう。

３．読み聞かせに関する調査

３．１　調査の目的

本調査の目的は、長新太の作品を取り上げ、実際に幼児はナンセンス絵本のどこに反応し興味を示すか、また、大人はナンセンス絵本をどのように捉えているかについて明らかにすることである。

３．２　調査の方法

家庭での読み聞かせ場面の動画分析調査とアンケート調査を実施した。読み聞かせ場面の動画分析調査は、幼稚園等の年少児クラスから年長児クラス[35]に在籍する年齢に該当する幼児がいる家庭の保護者に、ナンセンス絵本と呼ばれている３冊（長新太作『キャベツくん』[36]『ゴムあたまポンたろう』[37]『ごろごろにゃーん』[38]）を読み聞かせてもらい、幼児の反応や表情を撮影した動画送付を依頼して実施した。また、アンケート調査については、オンラインフォーム作成ツール Google Forms を用いて、保護者に各絵本を読み終えた後の幼児の反応や保護者の感想等について回答を求めるという方法で実施した。読み聞かせ場面の動画分析調査は４家庭（幼児５名、保護者４名）、アンケート調査５家庭（幼児６名、保護者５名）から協力が得られた。以下幼児を C1 児～ C6 児、保護者には P を付して表記（C1 児の保護者は C1 児 P）する。

読み聞かせ場面では、幼児がリラックスした普段の読み聞かせの雰囲気を観察したいと考えたため、筆者ではなく幼児と信頼関係のできている保護者に絵本を読み聞かせする様子の撮影をお願いした。

アンケート調査の質問項目は、以下の通りである。

①保護者の性別　②保護者の年齢　③幼児の性別　④幼児のクラス　⑤幼児の年齢

⑥読んでくださった絵本　⑦各絵本の認知度　⑧各絵本を読んだ際の幼児の反応（項目は次の通り：ア．面白がっていた、イ．笑っていた、ウ．真剣だった、エ．つまらなそうだった、オ．早く続きが見たそうだった、カ．細かい絵の部分に反応していた、キ．言葉（擬音語）を繰り返していた、ク．特に目立った反応はなかった、ケ．その他）

⑨各絵本を読んだ後の幼児の反応（項目は次の通り：ア．内容や絵についての質問があった、イ．肯定

的な発言があった、ウ．否定的な発言があった、エ．「面白かった」や「楽しかった」という発言があった、オ．「もう一度読んで」という発言があった、カ．幼児自身で絵本をめくって読んでいた、キ．「つまらなかった」や「面白くない」という発言があった、ク．絵本の中に出てくる言葉を言っていた、ケ．特に目立った反応はなかった、コ．その他）　⑩各絵本を読んだ後の保護者の考えや感想（項目は次の通り：ア．物語が面白かった、イ．読んでいて楽しかった、ウ．なんとなく面白いと感じた、エ．子どもは面白がっていたが何が楽しいか分からなかった、オ．読んでいてつまらなかった、カ．最初はつまらなそうだと思ったけど読んでみたら考えが変わった、キ．文が理解できなかった、ク．絵が理解できなかった、ケ．絵が可愛かった、コ．絵が面白かった、サ．絵があまり好きではなかった、シ．ユニークだと感じた、ス．おかしい・変だと感じた、セ．不思議だった、ソ．また読んでみたい、タ．もう読まないと思う、チ．他の長新太の絵本も読み聞かせしてみたくなった、ツ．その他）　⑪その他

なお、項目に関しては、各絵本に対して肯定的意見、否定的意見としてそれぞれの項目を設定した。⑩の保護者の考えや感想の項目は、面白いと感じる中でもどのように／どのような点に面白いと感じているのか、また、絵本の中の絵や文のどのような部分に大人が着眼しているのか把握するために、細かく設定した。

３．３　調査の結果

３．３．１　読み聞かせ場面の動画分析調査

読み聞かせ場面の動画分析調査は４家庭（幼児５名、保護者４名）から協力を得て実施した。C2 児と C6 児はきょうだいであるため、幼児と保護者の数が一致していない。対象絵本の読み聞かせは、３冊全てでは家庭への負担となると考え、１冊～３冊の内何冊でも可能だとした。そのため、各絵本に対して読み聞かせした人数が異なっている。

また、読み聞かせ中の状況や様子においては、C2 児、C6 児は幼児が横並びとなり、読み手の保護者が対面におり読み聞かせする形で、一つ一つの絵本の合間で手遊びを行ったとの報告があった。C5 児も読み手の保護者が対面におり読み聞かせする形であった。C3 児、C4 児は読み手の足の上に幼児が乗っており、幼児と同じ方向から読み聞かせする形であった。C3 児は絵本を読み手が持って読み聞かせをし、C4 児は絵本を机に置いて読み聞かせを行っていた。

表１　読み聞かせ場面の動画分析調査の概要

略称	幼児のクラス	幼児の年齢	幼児の性別	『キャベツくん』の読み聞かせ	『ゴムあたまポンたろう』の読み聞かせ	『ごろごろにゃーん』の読み聞かせ
C2 児	年中	４歳８か月	男	○	○	○
C3 児	年中	５歳４か月	女	○	○	○
C4 児	年長	５歳７か月	男	○	○	○
C5 児	年長	６歳０か月	女	×	○	○
C6 児	年長	６歳５か月	女	○	○	○

各絵本の読み聞かせ場面の動画をいただいた家庭を○、いただかなかった家庭を×と表記している。C2 児と C6 児はきょうだいであり、一緒に読み聞かせを聞いている。３冊すべてについて動画分析を行ったが、本稿では幼児と大人の受け止め方の違いが最も顕著の表れていると考えられた『キャベツくん』を取り上げる。

幼児の反応として、発話が見られた場合、「　」内に記入し、目立った行動や表情の変化が見られた場合、（　）内に記入する。真剣な表情や目立った反応がない場合には、幼児の反応として記入しないこととする。ただし、発話に対しての表情を記す際には真剣な表情も記入する。

表２　『キャベツくん』の動画分析（前半）

頁	頁の内容（物語文）	年中､4 歳（C2 児）	年中､5 歳（C3 児）	年長､5 歳（C4 児）	年長､6 歳（C6 児）
p.1	キャベツくん			「キャベツくんしかいないじゃん」	
pp.2-3	キャベツくんがあるいてくるとブタヤマさんにあいました。 「こんにちは」と、キャベツくんがあいさつをしました。 ブタヤマさんは「フー」といいました。かぜも「フー」とふいています。			「あ、ブタブタ！」（ブタヤマさんを指差す） 「ブタヤマさん！？ってなんだ！」 「ヒュー」（ページをめくると同時に）	
pp.4-5	ブタヤマさんが「あのね、おなかがすいてフラフラなんだ。キャベツ、おまえを食べる！」 そういって、キャベツくんをつかまえました。 キャベツくんが「ぼくをたべると、キャベツになるよ！」といいました。		（ニヤリと笑う）	「キャベツ…」	
pp.6-7	「ブキャ！」ブタヤマさんはそらをみて、びっくりしてしまいました。はながキャベツになっているブタヤマさんが、そらにうかんでいます。キャベツくんが、「ぼくをたべると、こうなる！」といいました。そうしたら､ブタヤマさんが「じゃあ、ヘビがきみをたべたら、どうなるんだ？」とききました。キャベツくんが「こうなる！」といいました。				
pp.8-9	「ブキャ！」ブタヤマさんはびっくりしてしまいました。おだんごみたいなキャベツのヘビがそらにうかんで、したをペロペロやっています。ブタヤマさんが「じゃあタヌキをたべたらどうなる？」とききました。キャベツくんが「こうなる！」といいました。		（1 秒ほど目線を上にし、考える様子）	「いひいひ！いいぇいいぇいいぇ」（笑いながら手をたたく） （手をバタバタさせ、次のページをめくろうとする様子）	（両頬に手を添える）。 「へー」（両手に手を添えたまま笑う）
pp.10-11	「ブキャ！」ブタヤマさんはびっくりしてしまいました。おなかがキャベツになっているタヌキがそらにうかんでいます。 ブタヤマさんが「じゃあ、ゴリラがたべたら？」とききました。 キャベツくんが「こうなる！」といいました。	「どうする…」（小声で言い、ニヤリとする）	「緑！お腹が緑だと思った！」（予想と一緒で嬉しそうにニコッと笑う） 「たぶん､あの、顔が…、体だと思うな。」（少し笑いながら目線を上にして真剣に考える様子）	「はーい。たのしいなぁ～」（絵を見て笑いながら次のページをめくりたそうにする様子。）	（両手に手を添えたまま、笑顔で大きく口を開ける様子 （首元に右手を添え、え！と口を開けた表情）
pp.12-13	「ブキャ！」ブタヤマさんはびっくりしてしまいました。キャベツのゴリラが、そらにうかんでいます。 かぜがすこしつよくなりましたが、びくともしません。ブタヤマさんが「じゃあ、カエルがたべたら？」とききました。 キャベツくんが「こうなる！」といいました。	「え！！」（笑顔で口を軽く開けて驚いた様子） 「へぇ～」（絵を見て微笑む）	「やったあ。」（予想と一致し笑顔で嬉しそうな表情） 「体…、体が緑だった…。」（絵をまじまじと見ている様子）	「くふふ、あっはっはっは」（絵を見て、笑いながら手をたたく） 「カエル！？カエル！これなあに。」（ページをめくりたそうな様子）	「え！！」（目と口が開き背筋が伸びる） 「えぇ～？」(少し不思議そうな表情)

※絵本にページ番号の記載がないため便宜的に表紙のページを１ページとして順にページ数を示した。

表３『キャベツくん』の動画分析（後半）

頁	頁の内容（物語文）	年中､4歳（C2児）	年中､5歳（C3児）	年長､5歳（C4児）	年長､6歳（C6児）
pp.14-15	「ブキャ！」ブタヤマさんはびっくりしてしまいました。キャベツのカエルが、そらにうかんで、はねています。ブタヤマさんが「じゃあ、ライオンふぁたべたら？」とすこしふるえながらききました。キャベツくんが「こうなる！」といいました。	「えぇ！」（C6児よりも遅れて真似するような様子）	「え、３人もいる。体だと思った。」（絵を見て少し驚いた様子）（少し微笑み、上を見上げる仕草をする様子）	「なにこれ！」（絵を見てびっくりした様子）「かえかえる？」	「えぇ！！」（ゴリラの時よりも大きな声とびっくりした様子）（少し微笑む様子）
pp.16-17	「ブキャ！」ブタヤマさんはびっくりしてしりもちをついてしまいました。キャベツのかおをしたライオンが、そらにうかんで、ほえています。 ブタヤマさんが「じゃあ、ゾウがたべたら？」とききながら、はなをブルブルふるわせました。キャベツくんが「こうなる！」といいました。	「えぇ！」（笑顔の様子） 「ゾウ！？」（前のめりになりながら微笑む様子）	「あ！顔が…あの、緑だと思った！」（笑顔で予想と一致したのが嬉しそうな様子）	（驚いた表情で身体を前後に動かす称す） 「ゾウ！？」	（笑顔で口を開けて背筋が伸びる様子）「顔が…！」「え！？」（前のめりになり驚いた表情から笑顔に変化する様子）「いいました」（読み手と顔を見合わせて一緒に読む）
pp.18-19	「ブキャ！」ブタヤマさんはびっくりしながら「だいたいわかっていたけれど、こうしてみると、びっくりします」といいました。それから、ちいさなこえで、「ノミがきみをたべたら、どうなるの？」とききました。キャベツくんが「こうなる！」といいました。	「え！！」（笑顔で口を開ける様子）	「あー。鼻だと思った。」（絵を見て笑顔の様子）	「誰ゾウ！？」	「えええー！！鼻が！」（口元を右手で押さえて背筋が伸びる様子）
pp.20-21	「ブキャ！」ブタヤマさんはびっくりしてしまいました。そらにはなんにもみえません。そらだけです。キャベツくんが「ノミはちいさいのでみえません」といいました。「だから、びっくりしたんだ！」とブタヤマさんがおこったようにいいました。		（不思議な様子で、今まで描いてあった絵の部分に目線を落とし、どこにいるのか探している様子）	「あれ？」	
pp.22-23	くさのいいにおいがブタヤマさんとキャベツくんをつつみます。ブタヤマさんが「じゃあ、クジラがきみをたべたらどうなる？」とききました。キャベツくんが「こうなる！」といいました。		「うーん。しっぽが緑だと思う。」（真剣に答える様子）		（少し微笑む様子）
pp.24-25	「ブキャ！」ブタヤマさんは、びっくりして、ひっくりかえってしまいました。キャベツのクジラがそらいっぱいにうかんでいます。キャベツのにおいがはなのあなからはいってきます。	「えええー！」（前のめりになり笑顔の様子）	「えぇ？」（絵を見て驚いた様子）「え、ええー！このぜんぶ？」（クジラの絵を指で囲みながら笑顔で面白そうな様子）	（驚きながらも笑顔で手足をバタバタさせる様子）	「えええええーーー！」（前のめりになり笑顔ながらも目と口が開いて驚いた様子）（前のめりになり笑顔の様子）
pp.26-27	ブタヤマさんは、こんなおおきなキャベツをたべたら、おなかがいっぱいになっていいだろうなあとおもいました。キャベツくんは、ちょっと、ブタヤマさんがかわいそうになりました。				
p.28	ブタヤマさんはもうなにもいいません。キャベツくんが「むこうにおいしいレストランがあるからなにかごちそうしてあげるよ」といいました。ブタヤマさんのよだれがかぜにのって、やわらかくながれていきました。				（拍手）

※絵本にページ番号の記載がないため便宜的に表紙のページを１ページとして順にページ数を示した。

３．３．２　アンケート調査

家庭での読み聞かせ場面の動画分析調査に加え、オンラインフォーム作成ツール Google Forms を用いて、保護者に各絵本を読み終えた後の幼児の反応や保護者の感想等について回答を求めるという方法で実施した。

アンケート調査には５家庭（幼児６名、保護者５名）から協力が得られた。読み聞かせ場面の動画分析調査には協力できないが、アンケート調査のみ協力という保護者もいたため、読み聞かせ場面の動画分析調査とアンケート調査で人数が異なっている。また、C2 児と C6 児はきょうだいで同じ保護者なので１名扱いとした。保護者は全て女性で、年齢層は 29 歳以下１名、30 ～ 39 歳１名、40 ～ 49 歳２名、60 歳以上１名であった。

表４　アンケート調査の概要

略称	幼児のクラス	幼児の年齢	幼児の性別	『キャベツくん』の読み聞かせ	『ゴムあたまポンたろう』の読み聞かせ	『ごろごろにゃーん』の読み聞かせ
C1 児Ｐ	年少	４歳７か月	男	×	×	○
C2 児Ｐ	年中	４歳８か月	男	○	○	○
C3 児Ｐ	年中	５歳４か月	女	○	○	○
C4 児Ｐ	年長	５歳７か月	男	○	○	○
C5 児Ｐ	年長	６歳０か月	女	×	○	○
C6 児Ｐ	年長	６歳５か月	女	○	○	○

以下、各絵本の「その他」の記述内容についてまとめたい。

読み終わった後の幼児の反応として、『キャベツくん』において C2 児 C6 児Ｐは、「『面白かった』や『楽しかった』という発言があった」、「『もう一度読んで』という発言があった」、「子ども自身で絵本をめくって読んでいた」、「絵本の中に出てくる言葉を言っていた」、C3 児Ｐは、「『面白かった』、『楽しかった』という発言があった」、C4 児Ｐは、「特に目立った反応はなかった」と回答している。加えて、C4 児Ｐは、保護者が問い掛けたところ「お腹がいっぱいになった」と言う反応が見られたとの回答もあった。さらに、C2 児 C6 児Ｐの年中の男児は、読み終わった後、絵本を手に取り読みながらブタヤマさんの驚く真似をし、また年長の女児は読み聞かせ後、絵本を手に取って読み「ライオンのキャベツが面白かった！」と感想を言っていたとの回答があった。

保護者の感想や考えとして、『キャベツくん』において C2 児 C6 児Ｐは「物語が面白かった」、「読んでいて楽しかった」、「ユニークだと感じた」、「おかしい･変だと感じた」、「不思議だった」、「また読んでみたい」、「他の長新太の絵本も読み聞かせしてみたくなった」、C3 児Ｐは「なんとなく面白いと感じた」、「絵が面白かった」、「ユニークだと感じた」、「また読んでみたい」、「他の長新太の絵本も読み聞かせしてみたくなった」、C4 児Ｐは「なんとなく面白いと感じた」、「絵が面白かった」と回答している。『ゴムあたまポンたろう』では、面白いという回答に加えて新たに C4 児Ｐは「絵が理解できなかった」、「おかしい・変だと感じた」、C5 児Ｐは「なんとなく面白いと感じた」等の回答があった。『ごろごろにゃーん』では、C2C6P は「単調な言葉の繰り返しなのに、世界に引き込むのがすごいと思った」、C3P は「繰り返しが面白かった」、「惹きつけるものがある絵だと思った」、C4 児Ｐは「文が理解できなかった」、「不思議だった」等と回答している。

加えて、その他の記述では、C3 児Ｐにおいて、「小学校３年生の兄の方が長新太の絵本を面白がっていた」との回答があった。

３．３．３　追加データの検討（３歳未満児の場合）

追加データとして、C2 児 C6 児Ｐの協力により、X 保育所（0 ～ 2 歳児が在籍）の異年齢混合クラスにおいて、おやつの時間前に『ごろごろにゃーん』の読み聞かせをする機会が準備され、そのときの幼児の様子

についての文字起こしデータが提供された。そのデータの検討結果は次の通りである。

2歳児クラス（2～3歳児）では、4ページあたりから、魚の飛行機を指差して「誰が運転しているの？」や「ねこちゃんがいっぱいなの？」という発言があった。街中を飛んでいる場面（pp.18-19.）では、「街を飛んでる！！」と発言があり、この辺りから笑顔になり、一番盛り上がったそうである。大きな飛行機と小さな魚の飛行機の場面（pp.26-27.）では、「これは誰と飛んでるの？ママ？」との発言があり、大きな手がある場面（pp.30-31.）からは、「誰の手？」などと質問が増えていた。最後に表紙を見て、「猫ちゃん見つけた！」という反応があった。

1歳児クラス（1～2歳児）では、幼児の表情は概ね真顔だが、関心のある表情で、pp.4-5. のあたりから、猫が乗っている飛行機と把握し、「にゃーにゃ」、「にゃー」などの言葉や指差しの反応が見られた。大きな飛行機と小さな魚の飛行機の場面（pp.18-19.）では、「パタパタ（飛んでいる飛行機を鳥の擬音で表現）」や、「こうき（ひこうき）」などという反応があった。読み終えてから再び表紙を見せると指差して「にゃー！にゃー！」と猫の存在を覚えている反応が見られた。

以上のように、1歳児クラス・2歳児クラス共に反応が見られる。幼児からの質問や絵に対する発言、面白がっている様子が見られ、2歳児クラスでは笑う場面もあった。3歳以上の幼児だけでなく、3歳未満児や小学生にもナンセンス絵本は楽しまれていることが分かる。

３．４　調査の考察

３．４．１　読み聞かせ場面の動画分析調査の考察

C4児の「ブタヤマさん！？ってなんだ！」（pp.2-3.）という反応や、C3児のニヤリと笑う（pp.4-5.）という反応より、村瀬（2010）が挙げている普段の生活における動物の擬人化（キメラ体）[39]において幼児は疑問やおかしさを抱くことがあると考えられる。

空に2度目のキメラ体が出現した後（pp.8-9. 以降）から、現実の中で知っている動物とキャベツが合体してどのような姿になるか想像し、絵に対する反応が見られる幼児が増えている。主に2回目のキメラ体の出現した後から、「こうなる！」の次頁に、空に動物とキャベツのキメラ体が浮かぶという法則性を理解してきているのではないかと考えられる。4回目、5回目、6回目、7回目のキメラ体（ゴリラ、カエル、ライオン、ゾウ）では、全員に反応が見られた。5回目のキメラ体のカエルは他のキメラ体よりも小さく、普段見ているようなカエルとは想像が異なっていたのか笑いではなく、驚きが多かった。8回目のノミにおいて、今まで空に出てきていたキメラ体が出てこないことに幼児の反応が一度落ち着くも、9回目のキメラ体（クジラ）で再び全員に反応が見られる。一番大きく、より多くの反応が見られたのは、2ページに渡った9回目のキメラ体（クジラ）が出てくる場面であった（pp.24-25.）。8回目のノミで空にキメラ体が浮かぶことがリセットされた後、今までは1ページだったキメラ体の出現に対して、2ページに渡った大きさに驚きが表れているのではないかと考えられる。C3児は今まで通り予想をしているが、幼児の予想を超えた大きなクジラが幼児の驚きや笑顔に繋がっていることが考えられるだろう。

図2では、空にキメラ体が出現する順で（①、②…）を記している[40]。（pp.16-17.）においては、絵本の次のページ（ゾウ）への反応が最も多く見られた場面であり、キメラ体出現の9回の中で一番反応が多いわけではない。このことから、キメラ体の絵への驚きや笑いに加えて、ブタヤマさんからキャベツくんへの問いかけ場面である「○○が食べたらどうなるの？」において、絵本の前のページでのキメラ体を踏まえた上で、幼児は想像を巡らせていると考えられる。

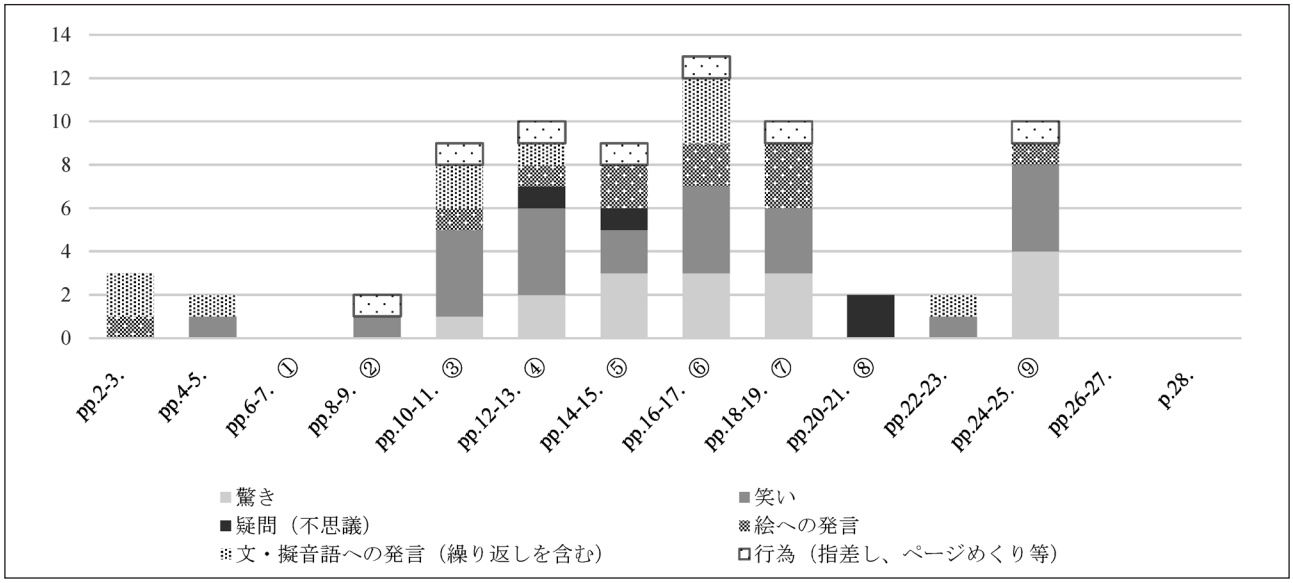
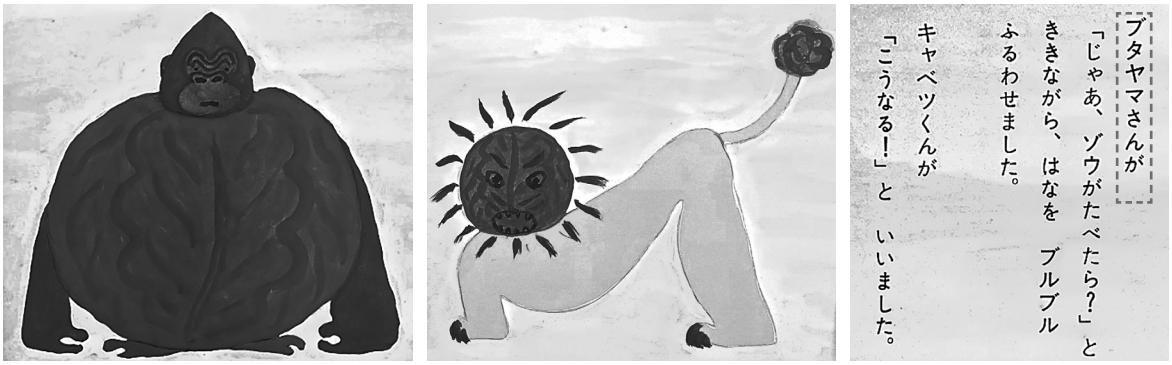
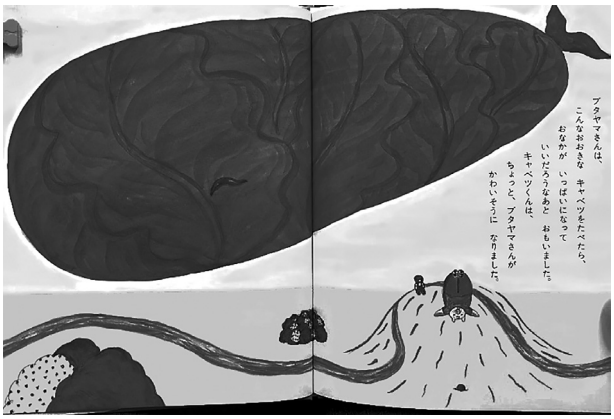


図２　『キャベツくん』の頁別の反応[41]

※絵本にページ番号の記載がないため便宜的に表紙のページを１ページとして順にページ数を示した。



（長新太作／絵，『キャベツくん』，東京，文研出版，1980 の左から p12，p.16，p.17 より抜粋して転載）



（長新太作／絵，『キャベツくん』，東京，文研出版，1980，pp.26-27 より転載）

図３　ゴリラとライオンとクジラのキメラ体

※絵本にページ番号の記載はない。文研出版より許可を得た上で表紙のページを１ページとして順にページ数を示して画像を掲載した。

３．４．２　アンケート調査の考察

アンケート調査においては大人が読み聞かせをした際の感想に加え、幼児の読み聞かせ時や読み聞かせ後の様子も質問した。また、「これおもしろいね。」「次は何かな」などの言葉掛けをすると、幼児の自然な発話や反応を観察することができなくなるという理由から、読み聞かせの際には、意図的な関わりをせず淡々と読んでもらったため、保護者と幼児の相互作用はほとんどなかったものと捉える。

読んでいる際の幼児の反応として、読み聞かせ場面の動画分析調査と合わせて見ると、『キャベツくん』や『ごろごろにゃーん』では、全員笑う場面が見られることから、「真剣」な様子だけでなく、「笑い」や「面白がる」様子も比較的多く見られた。

読み終わった後の幼児の反応として、読み聞かせ場面の動画分析調査で反応の多かったような、『キャベツくん』のキメラ体や『ごろごろにゃーん』での本物の飛行機と飛ぶ場面等を再度楽しむだけでなく、読み聞かせ時に感情の表出が見られなかった「ブキャ！」というブタヤマさんの驚きの声やポンたろうの表情などの細かな点等、読み終わった後の面白がっている場面や絵、詞などの回答が見られた。

大人の捉え方として、保護者が面白く感じていたのは文章よりも絵についてであった。しかし、「おかしい・変だ」、「不思議だ」、「文章が理解できない」、「絵が理解できない」等の回答も一定数見られた。大人にとっては、面白いと感じながらも不思議だ、理解できないと感じられる。それが、長新太のナンセンス絵本にはあるのではないかと考えられる。

３．４．３　読み聞かせに関する調査の総合考察：本調査の限界と課題

以上、読み聞かせ場面の動画分析調査及びアンケート調査では、年少児から年長児の家庭での読み聞かせより、ナンセンス絵本を読んでもらった幼児は、真剣に見るだけではなく、興味を示し笑ったり驚いたり、面白がったりしていた。幼稚園等での選書は誰がするか、という出発点を考えると、本来、幼稚園等で読み聞かせをしてより多くの幼児の反応調査を行いたかった。コロナ禍の状況の下「動画を撮影する」というプライバシーへの配慮をはじめとする、調査協力までの倫理的配慮の手続きの煩雑さから、限られた時間でそれを行うことは実現しなかった。家庭での読み聞かせ調査にとどまったこともあり、サンプル数の少なさが本研究の限界である。また、幼稚園等の年少児から年長児に協力を得て読み聞かせ場面調査を実施したが、アンケート調査の回答をみると、ナンセンス絵本は１～２歳児や小学生など他の年齢の子どもたちも興味を示したり面白さを感じたりしていることがわかった。今後、他の年齢層の子どもたちからも協力を得て、ナンセンス絵本のどのような点にどのような興味を示すか等について検討したい。さらに、読み聞かせる絵本についても、ナンセンス絵本と非ナンセンス絵本の比較も今後の課題である。次の機会にナンセンス絵本と非ナンセンス絵本の比較ができれば、ナンセンス絵本特有の特徴を浮き彫りにできるのではないかと期待される。

４．幼児の視点・発言・笑い

読み聞かせ調査より、長新太の作品に接した幼児から多くの発言や感情の表出が見られた。

幼児から文や擬音語の発言があったのは、主に1）登場人物に抱いた疑問、2）繰り返し出てくる文や鳴き声などの音、3）前ページの絵から形や状況が想像できるような問いかけ、4）現実と異なる状況、の四種類の場面である。さらに、幼児から絵に関する発言は、主に、a）現実で知っているもの（動物等）、b）想像（現実）と異なる絵、c）絵の細かな変化、の三種類の場面で観察された。

以上のように、一人一人の幼児が発言・反応する点は様々であったが、文や擬音語などの詞に対する反応と絵に対する反応がみられた。上記に挙げた箇所[42]で幼児は絵本に惹き付けられ、興味を示した。ナンセンス絵本以外（以下、「非ナンセンス絵本」と表記する）でも共通しそうな点もあろうが、長新太のナンセン

ス絵本は、「絵本」の面白く興味を引く要素に加え、4）の場面での詞に対する反応やb）で示した絵に対する反応など、「ナンセンス絵本」の特徴である詞や絵の面白さが、幼児への興味をかきたてていた。

また、本研究で取り上げたナンセンス絵本に接して、幼児はよく笑った[43]。「笑い」に関し、ここでは次の４点に関して整理したい。すなわち、1）想像と異なる意外性のある絵／幼児の想像を超えた絵、2）次の展開に幼児が予想したりワクワクしたりする問いかけや展開、3）現実と異なる状況／現実にはあり得ない状態、4）場所や大きさの不思議さ・可笑しさである。

これらの４つには繋がる部分があると考えられる。例えば、『キャベツくん』のキメラ体を例とすると、1）が一番の笑いの要因であると考えられるが、2）の問いかけがあるからこそ引き立つものであり、3）の現実にはあり得ない動物とキャベツのキメラ体であること、4）では『キャベツくん』には９種類のキメラ体が出てくるが、その最後に出てくるキャベツのクジラを見て最も多くの笑いの表情が表出されたことから、キメラ体の大きさの変化であるといえる。

以上のように、絵本ではめくった次のページにワクワクする展開や意外性があること、現実にはあり得ないような可笑しな状況や絵が組み合わさっていることで、幼児に、より大きな笑いを引き起こすのではないかと考えられる。ナンセンス絵本は、幼児がワクワクしたり可笑しく思ったりする要素が詰まっていることが多く、これらが幼児の笑いに繋がると考えられる。

５．むすびに

ナンセンス絵本読み聞かせ時に子どもたちは自然と言葉を発し、また、笑いの表出があったが、大人はナンセンス絵本に対して面白く感じる人もいれば、「不思議」「絵が理解できない」という回答もみられた。幼児の自然な発言や笑いは、「あり得ない状況や状態」という、「意外性」の場面で多くみられた。限られた調査協力者数から得られた回答からではあるが、大人と一言でいってもナンセンス絵本の捉え方は多様であることがわかった。

そもそも「ナンセンス」というのは、大人からの目線で使用される用語である。もしかすると、「ナンセンス」は幼児にとって「ナンセンス」イコール「non-（否定）+ sense：センス（感覚、意味、意識、理解）がない」のではなく、幼児は「ナンセンス絵本」を包括的に、面白く可笑しい絵本、不思議な絵本、笑える絵本の一つとして捉えているのではないだろうか。

大人と幼児の感覚が異なることから、絵本選びの際には大人が幼児に読み聞かせたい絵本だけではなく、幼児も絵本選びに参加して幼児が喜ぶ絵本にも目を向け、豊かな絵本環境を整えていくのが望ましいのではないかと考えられる。

謝辞

読み聞かせ調査にご協力くださいました保護者の方、お子様方に深くお礼申し上げます。また、本研究を行うにあたり、貴重な資料をたくさんご提供くださいました児童文学者で国際幼児教育学会絵本部会部会長の宮地敏子先生、並びに、卒業研究のご指導を賜りました共栄大学教育学部教授の山田千明先生に深くお礼申し上げます。そして、２年間同じゼミで共に勉学や研究に励んできた中妻かすみさん、前田颯志さん、山本彩加さんに深く感謝いたします。最後に、日常生活にて終始援助してくれた家族、友達に心から謝意を記します。

注

[1] 文部科学省（2018）p.228 より。

[2] 日本の就学前の幼児教育・保育機関には幼稚園、保育所、認定こども園、その他の施設がある。それらを含めて本論文では「幼稚園等」と記載する。

[3] 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センターと株式会社ポプラ社との共同研究「絵本・本と子どもの発達」における調査研究の第一弾として実施された研究。

[4] ここでいう「良い絵本」とは各種団体等で「良い絵本」として挙げられ推奨されている作品を指すと考えられる。

[5] 長瀬ら（2003）p.14 より。

[6] 長瀬ら（2003）pp.9-10 より。

[7] 長瀬ら（2003）p.13 より。

[8] 中村柾子（なかむらまさこ）は 10 年間幼稚園に勤務後、保育士として保育園で仕事をする。著書に評論『絵本はともだち』、絵本『えかきうたのえほん』（ともに福音館書店）がある（中村, 2009 の著者紹介より）。

[9] 代田知子（しろたともこ）は NPO ブックスタート理事に 2011 年から就任。他、公共図書館館長、司書、（一社）日本子どもの本研究会会長を務める（大日向・代田監修、NPO ブックスタート編、2022、p.246 より）。

[10] 中村・代田（2014）pp.55-63 をまとめたもの。

[11] 「ナンセンス」「ノンセンス」について、単なる表記上の問題と捉えたのは、調べた限り「ナンセンス」と「ノンセンス」についての差異について説明する文献を探し出せなかったためである。英和辞典等で確認すると、英和辞典等における「nonsense」の和訳は次の 3 つに整理されることがわかった。①「ナンセンス」のみ：磯部薫編（1999）『新コンサイス時事英語辞典』三省堂、小西友七・安井捻・國廣哲彌・堀内克明編（1997）『ブログレッシブ英和辞典（第 2 版）』小学館、小西友七・南出康生編（2006）『ジーニアス英和辞典 第 4 版』大修館書店、小島義郎・竹林滋・中尾啓介編（1984）『ライトハウス和英辞典』研究社、三省堂編集所編（2002）『コンサイス和英辞典 第 11 版』三省堂　②「ノンセンス」のみ：ハンフリー・カーペンター・マリ・プリチャード著，神宮輝夫監訳（1999）『オックスフォード世界児童文学百科』原書房　③「ナンセンスまたはノンセンス」と表記：佐藤弘編（1988）『外来語和英辞典＜英語を学び使う人のために＞』八潮出版社

[12] 磯部（1999）p.561,p.753，寺澤（1993）p.345,p.465，小西・南出（2006）p.1320,p.1734，小西ら（1997）pp.1029-1030,p.1346 等。

[13] 原（1992）p.16 より。

[14] 原（1992）pp.17-18 及び p.25 をまとめたもの。

[15] 日本児童文学学会（1988）pp.548-549 より。

[16] 山本（2017）p.50 より。

[17] 鵜野（2009）pp.51-53 より。

[18] 日本児童文学学会（1988）p.785 より。

[19] 笹倉（2016）p.35 より。

[20] 西尾ら（2000）p.1307 より。

[21] 松村ら（2005）p.1545 より。

[22] 森岡ら（1993）p.1893 より。

[23] 岩崎（2006）p.132 より。

[24] 中泉（2006）p.8 より。

[25] 福音館書店（2018）https://www.fukuinkan.co.jp/blog/detail/?id=203 より。

[26] 全国学校図書館協議会（2016）より。

[27] 中川ら（2011）p.314 より。

[28] 竹内（2015）p.57 の記載より孫引き。

[29] 今江（2006）p.18 より。

[30] 伊藤（2006）p.35 より。

[31] 竹内（2015）p.56。

[32] 1）発想に関しては、竹内（2015）の中の『アルマジロ』（ナート，1991）、今江（2006）より、発想の核やおおもとにナンセンスがあることを述べている。また、竹内（2015）の中の『サライ』（小学館，1998）、岩崎（2006）の中の『イラストレーション』（幻光社，1982）より、長新太自身が自らの絵本に対し、あらゆる物体に生命があるというアニミズム思想を挙げている。

[33] 2）展開に関しては、土井（2003）は「長新太の文章は、リズミカルな反復が多く、擬音語、擬態語も多用されている」と述べている。『ごろごろにゃーん』について、中川ら（2011）は「言葉と論理の独創的な選択と反復」、香曽我部（2012）は言葉の繰り返しを挙げ「見事な絵と詞の語り口」と述べている。また、小野（2006）は、長新太の作品の中には「こんな（こう、これ）」という語句がかなりの頻度で使われていると述べており、『ちへいせんのみえるところ』の「でました」と同様に「ことばに対応する絵を見なければ、提示されているものの内容がわからない」としている。さらに、土井（2003）は、長新太の絵本に対して「ゆるやかなストーリーの中で、やや変化を持たせた反復で展開していく作品が圧倒的に多い」としており、「さまざまなものが出現する（『ちへいせんのみえるところ』）」、「主人公とさまざまなものが出会う（『ながいながいすべりだい』）」、「登場人物が変身する（『はんぶんタヌキ』）」、「主人公がさまざまなものに見立てられる（『へんなおにぎり』）」というパターンと組み合わせがあると述べている。

[34] 3）絵に関しては、『ちょびひげらいおん』において、西本（2012）は「ライオン、蛇、ゴリラの共存する世界を、幼児の感覚にふさわしく描いた絵も楽しい」と述べている。『へんてこへんてこ』において、中川ら（2011）は「登場する動物たちは橋の上にさしかかると、からだが細長く伸びてしまう。われわれが通常イメージする動物の姿とはちょっと違う変形・歪形した姿に思わず笑みがこぼれる」と述べている。以上のことから、登場するキャラクターにおいても、実在する動物が不思議な形や様子で現れるところも魅力の一つだと考えられる。中川ら（2011）の中の『ユリイカ』（青土社，2002）より「絵で表現する部分が大きいのが私の絵本」と長新太が自身の絵本について述べており、さらに中川ら（2011）は『ごろごろにゃーん』について「話の内容は、すべて絵が語っている」と述べている。さらに、小野（2006）は「＜風景の固定＞というのは、長新太の作品を大きく特徴づけるおなじみの要素」、「固定されるのは戸外の風景」と長新太の絵本の特徴を挙げており、土井（2007）は、長新太の作品の中には地平線や水平線が多くあり、横線を一本引いて、その世界を安定させてから、動物などを登場させてとてもかわいたナンセンス世界を展開すると述べている。

[35] 年長児クラスに在籍する幼児は 2016 年 4 月 2 日生まれ～ 2017 年 4 月 1 日生まれ、同様に、年中児クラスは 2017 年 4 月 2 日～ 2018 年 4 月 1 日生まれ、年少児クラスは 2018 年 4 月 2 日～ 2019 年 4 月 1 日生まれである。※民法第 143 条（暦による期間の計算）第 2 条「週、月又は年の初めから期間を起算しないときは、その期間は、最後の週、月又は年においてその起算日に応当する日の前日に満了する。ただし、月又は年によって期間を定めた場合において、最後の月に応当する日がないときは、その月の末日に満了する。」より。

[36] 長（1980）全ページ（ページ番号記載なし）

[37] 長（1998）全ページ（ページ番号記載なし）

[38] 長（1976）全ページ（ページ番号記載なし）

[39] 村瀬（2010）pp.92-93 より。

[40] 第 2 章第 1 節で述べたように、発声を伴わない表情のみの表出も「笑い」として捉える。

[41] 「驚き」と「笑い」、また「驚き」もしくは「笑い」と「絵への発言」もしくは「文字への発言」が同時に起きている場合には双方に反応として加えている。

[42] 「4. 幼児の視点・発言・笑い」で挙げた 1)～4) 及び a)～c)。

[43] 「2.1 『ナンセンス絵本』の定義について」で述べたように、発声を伴わない表情のみの表出も「笑い」として捉える。

引用文献・参考文献

磯部薫編，『新コンサイス時事英語辞典』，東京，三省堂，1999

伊藤俊治，“絵のなかへ入ってゆく道”，『飛ぶ教室：児童文学の冒険』，7 号，2006，pp.34-40

今江祥智，“いつだって長さんはいた”，『飛ぶ教室：児童文学の冒険』，7 号，2006，pp.14-27

岩崎真理子，“『ノコギリザメのなみだ』のナンセンスを楽しむ－バカバカしさの奥にある哲学”，谷本誠剛・灰島かり編，『絵本をひらく：現代絵本の研究』，京都，人文書院，2006，pp.132-138

鵜野祐介，『伝承児童文学と子どものコスモロジー：「あわい」との出会いと別れ』，京都，昭和堂，2009

大日向雅美・代田知子監修，ブックスタート編，『ブックスタートの 20 年：自治体と市民が赤ちゃんの幸せのためにつながり実現してきたこと：20th Anniversary Book』，東京，ブックスタート，2022

小野明，“「こんな」人の「そうげん」について”，『飛ぶ教室：児童文学の冒険』，7 号，2006，pp.92-97

香曽我部秀吉・鈴木穂波編著，『絵本をよむこと：「絵本学」入門』，東京，翰林書房，2012

小島義郎・竹林滋・中尾啓介編，『ライトハウス和英辞典』，東京，研究社，1984

小西友七・安井捻・國廣哲彌・堀内克明編，『ラーナーズプログレッシブ英和辞典第 2 版』，東京，小学館，1997

小西友七・南出康生編，『ジーニアス英和辞典第 4 版』，東京，大修館書店，2006

笹倉剛，“ナンセンス絵本の魅力とセラピー効果についての研究”，『神戸親和女子大学言語文化研究紀要』，10 巻，2016，pp.33-61

佐藤弘編著，『外来語和英辞典：英語を学び使う人のために』，東京，八潮出版社，1988

三省堂編集所編，『コンサイス和英辞典第 11 版』，三省堂，2002

新藤慶・高月教惠，“保育所における絵本を軸とした子育て支援と家庭における絵本体験：岡山県 A 町を対象として”，『新見公立短期大学紀要』，30 巻，2009，pp.23-36

全国学校図書館協議会，“全国学校図書館協議会選定第 28 回「よい絵本」”，入手先＜ https://www.j-sla.or.jp/pdfs/yoiehon28-all.pdf ＞，（参照 2023-03-24）

竹内清乃編，“長新太：ユーモアとナンセンスの王様”，『別冊太陽 日本のこころ』，234 号，東京，平凡社，2015

長新太作／絵，『ごろごろにゃーん』（第 31 刷），東京，福音館書店，1976

長新太作／絵，『キャベツくん』，東京，文研出版，1980

長新太作／絵，『ゴムあたまポンたろう』，東京，童心社，1998

寺澤芳雄監修，『BBI 英和連語活用辞典』，東京，丸善，1993

土井章史，“長新太：ナンセンスの地平線からやってきた”，『らんぷの本』，東京，河出書房新社，2007

土井安子，“論ずる／ナンセンス絵本のおもしろさ：長新太と佐々木マキ”，月間書評誌／日本子どもの本研究会編，『子どもの本棚』，32 巻，2 号，2003，pp.26-31

東京大学大学院教育学研究科付属発達保育実践政策学センター・ポプラ社（2020）“『絵本』に関する調査 _ 報告書速報版”，東京大学大学院教育学研究科付属発達保育実践政策学センター，入手先＜ https://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/news/17816/ ＞，（参照 2023-03-24）

中泉敦編，“ナンセンス絵本Ｌ・Ｍ・モンゴメリゆかりの地を訪ねて”，『この本読んで』，6 巻，19 号，2006，pp.4-15
中川素子・吉田新一・石井光恵・佐藤博一編，『絵本の事典』，東京，朝倉書店，2011
中西一弘・覚道知津子，“子どもが選択する絵本と大人が選択する絵本に関する一考察：幼児絵本におけるマンガの手法の問題を中心に”，『大阪教育大学紀要』，40 巻，2 号，1992，pp.223-238
中村柾子，『絵本の本』，東京，福音館書店，2009
中村柾子・代田知子，“子どもの見方、大人の見方（特集子どもが見つけた魅惑の絵本”，『母の友』，732 号，福音館書店，2014，pp.55-63
長瀬壮一・幸本由紀子・富本佳郎，“幼稚園における絵本の読み語りに関する研究（1）：子どもの絵本の楽しみ方”，『神戸女子大学短期大学紀要』，48 巻，2003，pp.1-20
西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編，『岩波国語辞典第 6 版』，東京，岩波書店，2000
西本鶏介，“児童文学時評：一九七〇－一九八二年”，『西本鶏介児童文学論コレクション』，東京，ポプラ社，2012
日本児童文学学会編，『児童文学事典』，東京，東京書籍，1988
原昌（1992）“ナンセンス・ワールドのスケッチ－ナンセンス文学の諸相”日本児童文学者協会編『日本児童文学』，38 巻，4 号，東京，文溪堂，pp.16-25.
ハンフリー・カーペンター・マリ・プリチャード著，神宮輝夫監訳，『オックスフォード世界児童文学百科』，東京，原書房，1999
福音館書店，“9 月 24 日　長新太さん｜ナンセンス絵本の第一人者”ふくふく本棚，入手先＜ https://www.fukuinkan.co.jp/blog/detail/?id=203 ＞（参照 2023-03-24.）
松村明・山口明穂・和田利政編，『旺文社国語辞典第十版』，東京，旺文社，2005
村上太郎・小路由紀乃，“幼児における絵本の表紙選択の発達的検討：幼児の好む表紙と大人が読んであげたい表紙は一致するか？”，『九州女子大学紀要』，56 巻，1 号，2019，pp.49-59
村瀬学，『長新太の絵本の不思議な世界：哲学する絵本』，京都，晃洋書房，2010
森岡健二・徳川宗賢・川端善明・中村明・星野晃一編，『集英社国語辞典（横組机上版）』，東京，集英社，1993
文部科学省，『幼稚園教育要領解説』，東京，フレーベル館，2018，P.228
山本美希，“ナンセンス絵本・文字なし絵本”，絵本学会機関誌編集委員会編“特集 1 複眼で絵本を選ぶ”，『絵本 BOOKEND』，14 号，朔北社，2017，pp.50-51